

保育者・教員養成校における音楽指導に関する一考

ー基礎的な読譜力育成に向けた取り組みー

二宮 貴之

聖隷クリストファー大学 社会福祉学部

Study on Music Instruction in Child Care and Teacher Training Schools

～ Efforts to develop basic music reading skills ～

Takayuki NINOMIYA

Seirei Christopher University School of Social Work

抄録

本研究は、音楽教育に関する実践的研究であり、音楽のリテラシーを向上させる取り組みの一環として大学生を対象に基礎的な読譜力（ドレミの階名読み）の育成に向けた取り組みを行った。研究の内容としては、2017年度から2019年度に入学した1年次生を対象に「読譜」に関する意識調査を実施した結果、年々楽譜が読めないと感じている学生が多く入学していることが窺えた。そのような読譜に関する意識調査の結果を受け、学生の読譜力を向上させることは喫緊の課題であると捉えた。具体的な教育方法としては、2019年度入学生に通年による読譜課題（ト音譜表、ヘ音譜表）を実施し、結果を数値化し客観的なデータを収集することを試みた。同時に読譜課題実施前後の学生の意識の変化についてアンケート調査し、通年で取り組んだ読譜課題により学生の内面がどのように変容するかについても示している。本研究は、読譜に関する事前調査結果、読譜課題の客観的データの提示、読譜課題実施前後の学生の意識の変化について総合的に考察し、基礎的な読譜力（ドレミの階名読み）がどのように育成されているのかについて報告している。

キーワード：音楽教育、指導法、読譜、器楽

Key words : Music Education, Teaching Method, Reading sheet music, Instrumental music

I. はじめに

保育者・教員養成校では幼児教育、初等教育の音楽関連科目として「器楽」「音楽」「音楽表現」などが配置されており、いずれも技術や感性を磨く事を目的とし授業展開がなされている。これらの科目担当者として学生指導をする中で多くの学生が「読譜」することにつまずいている場面をよく目にする。この「読譜」することへのつまずきを大学入学初期段階で少しでも解消する事は、喫緊の課題であり、音楽教員として学生指導をする上で普遍的なテーマであると捉えている。この読譜についての学生の課題は聖隷クリストファー大学（以降、本学と表記する）のみならず、本学以外の保育者・教員養成校の教育機関においても課題とされている。永井（2019）は「譜面を読むことができないければ、音楽の基礎を修得したとは言えないのではないだろうか」と述べており、大学生への読譜指導は器楽の指導を充実させるための基礎となるとし、「器楽」の講義の中で学修者の進度に応じたグレード制を取り入れ継続的に読譜指導を行っている⁽¹⁾。その他の大学でも読譜力育成についての報告は散見され、読譜指導についての研究の必要性は高い。

また、高等教育機関における入学試験の現状は様々な形態がある。例えば、入学試験に「音楽」に関する試験を課す場合や課さない場合がある。本学では後者であり、学生は音楽経験者・未経験者が混在する形で入学している。音楽経験が浅い学生は、入学時に約4割程度在籍しており、「読譜」することにつまずきを覚える学生が多くいるという背景を抱えている。特に楽譜を読める事が必須条件となる「器楽」の科目は、読譜が苦手な学生にとり避けては通れない関門となる場合がある。このような状況の中で

学生に対し教員としてどのような音楽の指導及び実践を行えば、学生たちの「読譜」に関する能力を引き出し、より良い方向に導いていくことができるのだろうか。音楽に関する知識・技術を養ってもらえるのだろうか。そのようなことに苦悩しながら幼児教育の「器楽」の読譜指導の在り方を探る必要性を日々強く感じている。本研究では、ドレミの階名読み、リズム、音程などを総合的に修得し音楽の構成を読み取る「総合的な読譜力」ではなく、大学に入学し音楽経験が浅い学生も含まれているため「基礎的な読譜力（ドレミの階名読み）」の育成を喫緊の課題と捉え実施することとする。

先行研究の中で、鈴木（2014）は、小学校教員・保育者養成校の学生を対象に音楽の基礎力の育成を目的に拍、リズム、音程の視点から読譜力育成についてアプローチしている⁽²⁾。平松（2009）は、保育者養成校において基礎技能を育成する「音楽」の授業において学生の読譜力について考察し読譜指導の必要性を報告している⁽³⁾。二宮（2020）は、読譜指導の一環として階名唱を行い、歌う力とピアノを弾く力を同時に養う音楽指導を実践している⁽⁴⁾。河合、他（2017）は、保育者にとり多様化した音楽活動に対応するため、読譜力の育成が必要であるとし、大学1年年次生に音楽に関するアンケートを実施し、「線と間の指導法」、「読譜フラッシュカード」などを取り入れ指導している⁽⁵⁾。市橋、他（2017）は、ピアノ実技に関する実態分析と指導の方向性に関する報告で大学1年年次生を対象に、ピアノに関するアンケート調査を実施し、楽典と関連付けた読譜指導を実施している⁽⁶⁾。竹内（2020）は、小学校音楽教育における読譜力育成のカリキュラム開発について報告しており、第1学年から第6学年までの教科書教材を分析し、各学年に適した読譜指導に

について「音符の音価のグラフづくり」、「フラッシュカード（音符・休符）」などを紹介している⁽⁷⁾。二宮、他（2010・2011）は、音楽経験者・未経験者における読譜力育成に向けた取り組みについて、ドレミの階名読みに焦点化して読譜指導を行っている^{(8) (9)}。

これらの先行研究を踏まえ、本研究では、保育者・教員養成校の音楽関連科目の中でも音楽活動に必要不可欠であり、音楽の技術力面において基礎・基本の部分を担当する「器楽」の講義を取り上げ、学生の現状と課題を把握した上で実施した基礎的な読譜力育成（ドレミの階名読み）に向けた取り組みについて報告する。

II. 研究目的

本研究では、まず本学に入学した学生に対して読譜に関する調査を実施し、学生が抱えている課題について明らかにする。さらに明確化された課題に対して読譜課題を実施することにより、基礎的な読譜力（ドレミの階名読み）を育成する取り組みを行い、2019年度の「器楽」授業の中で通年を通して実施した読譜課題の取り組みの結果を示し、意識の変化について捉えることを目的とする。なお、本研究は国際幼児教育学会第40回年次総会ハワイ大学ヒロ校において口頭発表した内容を基盤とし、2019年度春 semester のデータに新たに2019年度秋 semester の読譜課題のデータを加えた通年のデータを分析している。

III. 研究方法

1. 読譜に関する意識調査

- ・対象：本学に在籍する学生（1年次生）
- ・調査時期：2017年～2019年（本学に入学し

た4月に調査した）

- ・対象人数：2017年度生38名、2018年度生21名、2019年度生30名
- ・方法：ト音譜表、ヘ音譜表、大譜表の読譜の項目について四件法で質問し、MicrosoftのExcelを用いて集計結果をグラフ化し考察する。

2. 読譜課題の実施と意識の変化について

- ・対象：本学の2019年度生30名（1年次）
- ・調査期間：2019年4月～2020年1月（通年で開講する「器楽」の授業期間で2週間に1回のペース）
- ・方法：読譜課題は、ト音譜表課題とヘ音譜表課題の2種類がある。「器楽」担当の教員が授業冒頭にA4用紙1枚に2種類の課題が収められたシートを配布し、学生は各課題1分間の制限時間の中でそれぞれの課題に取り組んだ。教員は、課題実施後シートを回収し、採点した後学生に返却している。次の授業を目途に返却しておりできるだけ素早く結果をフィードバックすることに努めた。学生の採点結果は教員が集計表に毎回まとめ保管している。課題ともに毎回、同一の課題を通年で14回実施した。ト音譜表課題は、1小節に4分音符を4つずつ配置し、合計20小節であり4分音符1つを1点として採点したため、上限80点満点の課題である。一方、ヘ音譜表課題は、1小節に4分音符を4つ配置し、計16小節であり4分音符1つを1点として採点したため、上限64点満点の課題である。採点結果はMicrosoftのExcelにデータを集約し、単純集計しグラフ化した。また、ト音・ヘ音譜表課題の実施前後について比較し、各譜表に対する意識の変化について記した。また、授業の最終回で実施したアンケート

トの記述箇所についても掲載し、学生の読譜課題への取り組みについて数的、質的の両面から意識の変化について報告する。なお、学生にはアンケート等の結果についてデータを研究に活用することの承諾を事前に得ており、倫理上の配慮はなされている。

IV. 結果及び考察

1. 読譜に関する意識調査結果

図1は、2017年～2019年の3年間学生に対し大学入学時点で実施した音楽の意識調査の内、ト音譜表の読譜に関する項目の結果である（回収率100%、n = 89、回答者の人数が各年異なるため割合を比較している）。2017年では、スラスラ読める、ゆっくりなら読める、を合わせると73%の学生が「ト音譜表を読める」と回答したのに対し、2019年は、スラスラ読める、ゆっくりなら読める、を合わせた「ト音譜表を読める」と回答した者は47%という結果であった。2017年のあまり読めない、読めない、を合わせた「ト音譜表を読めない」と回答した者

は27%であったのに対し、2019年はあまり読めない、読めない、を合わせた「ト音譜表を読めない」と回答した者は53%となり、割合比較でいうと約2倍の差が見られた。データを経過観測すると年々ト音譜表を読めないと感じる学生が増加傾向にある事が窺える。

図2は、2017年～2019年の3年間学生に対し大学入学時点で実施した音楽の意識調査の内、ヘ音譜表の読譜に関する調査の結果である（回収率100%、n = 89、回答者の人数が各年異なるため割合を比較している）。2017年では、スラスラ読める、ゆっくりなら読める、を合わせると71%の学生が「ヘ音譜表を読める」と回答したのに対し、2019年は、スラスラ読める、ゆっくりなら読める、を合わせた「ヘ音譜表を読める」と回答した者は47%という結果であった。2017年のあまり読めない、読めない、を合わせた「ヘ音譜表を読めない」と回答した者は29%であったのに対し、2019年はあまり読めない、読めない、を合わせた「ヘ音譜表を読めない」と回答した者は53%となり、割合比較でいうと約2倍弱の差が見られた。ト音譜表

図1 ト音譜表の読譜に関する意識調査結果

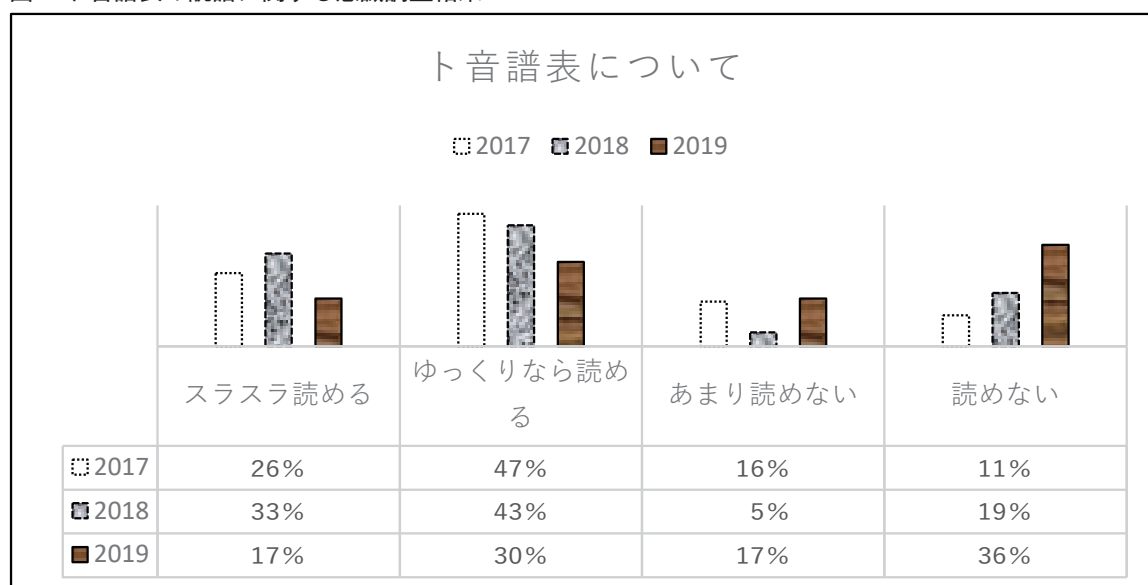
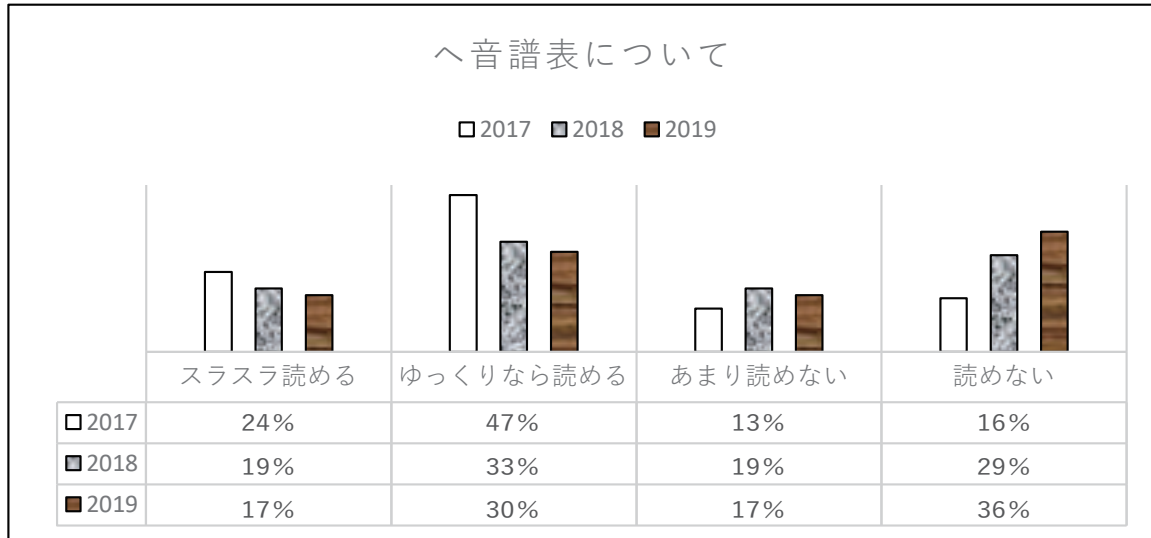


図 2 ヘ音譜表の読譜に関する意識調査結果

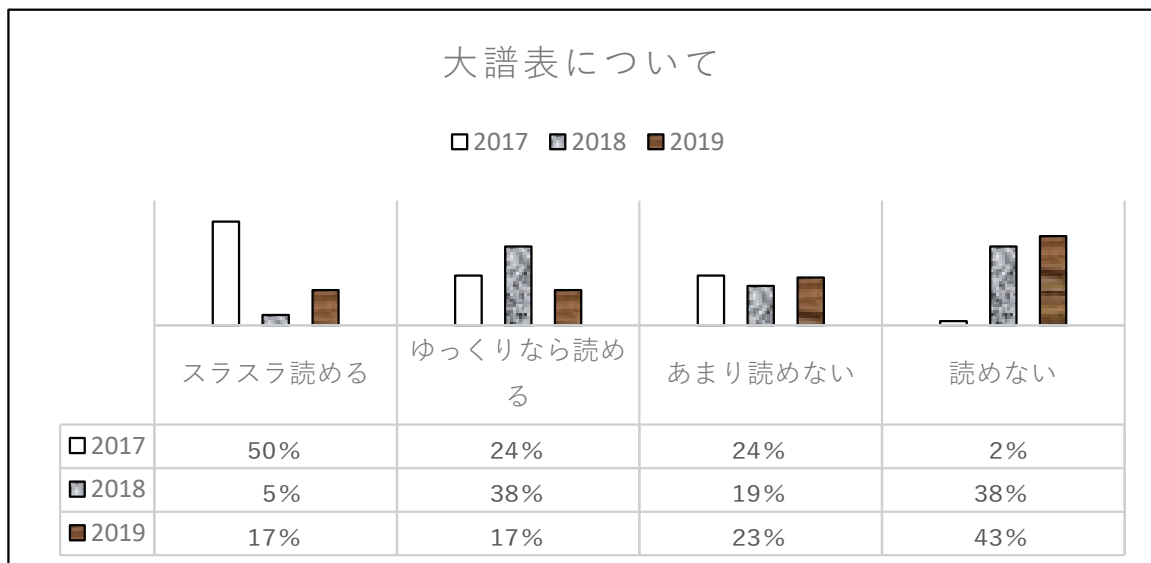


同様、ヘ音譜表も学生は年々楽譜が読めないと感じる傾向にある。

図 3 は 2017 年～2019 年の 3 年間学生に対し大学入学時点で実施した音楽の意識調査の内大譜表の読譜に関する結果である（回収率 100%、n = 89、回答者の人数が各年異なるため割合を比較している）。2017 年では、スラスラ読める、ゆっくりなら読める、を合わせると 74% の学生が「大譜表を読める」と回答した

のに対し、2019 年は、スラスラ読める、ゆっくりなら読める、を合わせた「大音譜表を読める」と回答した者は 34% という結果であった。2017 年のあまり読めない、読めない、を合わせた「大譜表を読めない」と回答した者は 26% であったのに対し、2019 年はあまり読めない、読めない、を合わせた「大音譜表を読めない」と回答した者は 66% となり約 2 倍以上の差が見られた。また、スラスラ読める、の項

図 3 大音譜表の読譜に関する意識調査結果



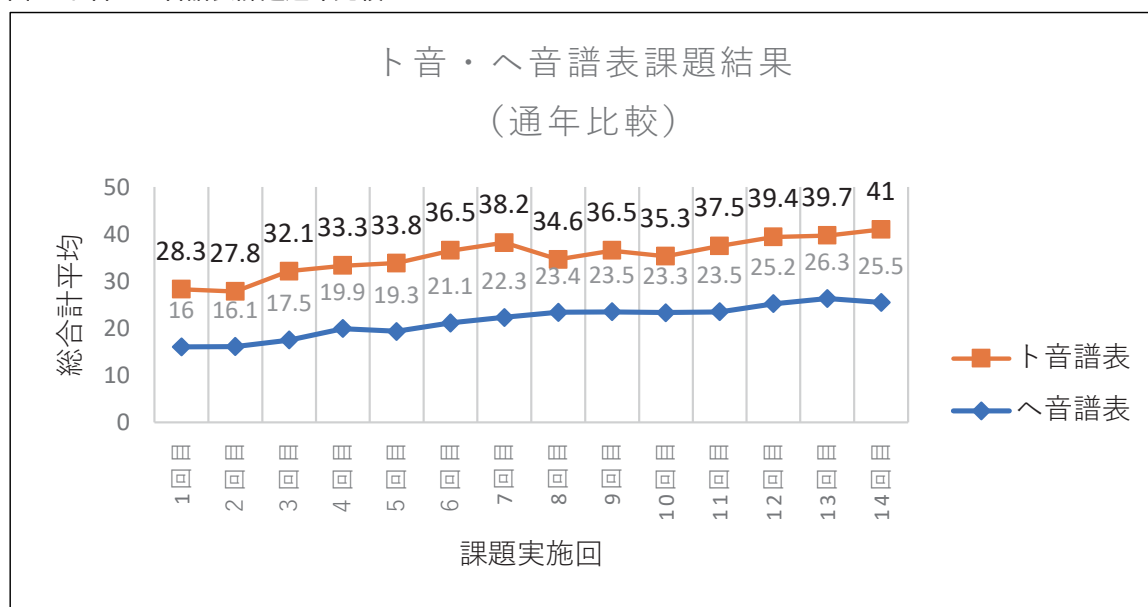
目では2017年が50%であったが、2018年5%、2019年17%と大きな開きが見られた。一概に2017年を基準にすることが正しいとは言えないが、いずれにしても5%、17%という低い数値からして、大譜表をスラスラ読めると感じる学生は減少傾向にある。2018年と2019年のゆっくりなら読める、の項目について比較すると、2018年は38%と比較的高い数値を示し、2019年が17%となりその差が2倍以上の差が見られる。大譜表についても読めないと感じる学生が年々増加していると言える。

2. 読譜課題（ト音譜表課題、ヘ音譜表課題）の調査結果について

図4は、2019年度生30名が「器楽」の冒頭に1分間ずつ通年で同一のト音譜表課題、ヘ音譜表課題に取り組んだ結果である。各課題とも1音1点（1小節に4分音符を4音記載）で数値化し担当教員がデータを管理した。課題の音域は広く五線以外の高音域、低音域をカバーしている。各課題は器楽の授業の冒頭1分間で

取り組み、2019年度春・秋セメスターの通年（全14回）で取り組んだ読譜課題の結果について示している。上段の折れ線は2019年度入学生1年次生30名の学生が毎回1分間取り組んだト音譜表課題の平均値の推移を示し、下段の折れ線はヘ音譜表課題の平均値の推移を示している。ト音譜表課題については1回目の平均値が28.3であり小節数に換算すると1分間で約7小節読めていた。8回目の秋セメスター開始時に数値が下降しており、夏季休暇あけの読譜力は落ちている事が窺える。その後、数値は右肩上がりでも上昇を続け14回目の秋セメスター終了時点では41点の平均値となり約10小節読めていた。ト音譜表課題の結果から、課題取り組み当初から終わりまでの数値を比較すると全相的に数値が上昇しているため一定の効果が見られる。一方、ヘ音譜表課題については1回目が16点であり4小節読めている。ト音譜表課題では8回目の数値は下降していたのに対し、ヘ音譜表課題は変化が見られず右肩上がりでも数値が微増していた。14回目は数値がやや伸び悩

図4 ト音・ヘ音譜表課題通年比較



んでおり通年の取り組みであっても学生が苦手とするヘ音譜表課題はト音譜表課題の結果のように綺麗な右肩上がりで見え続けるとは言い難い。1回目の16点と14回目の25.5点を比較すると明らかに通年通して課題に取り組むと力がついている。しかし、ト音譜表課題の14回目の41点とヘ音譜表課題の14回目の25.5点を比較するとその差は15.5点の開きがあるため、特にヘ音譜表については今後も継続的な取り組みを行う必要がある。

3. 読譜課題実施後の学生の意識の変化について

①ト音譜表課題の意識の変化について

図5はト音譜表の読譜についての意識調査結果である。対象は2019年度入学生30名(n=30)、質問は「あなたはト音譜表を読むことができますか」であり、入学当初(4月初旬)のト音譜表課題開始時と課題終了時(2020年1月末)に調査し前後比較している。スラスラ読める、の項目では、課題開始時に8名であったが終了時は12名に増加していた。ゆっくりなら読める、の項目では課題開始時に11名であったが終了時は17名に増加していた。あまり読めない、の項目では課題開始時に6名であったが終了時は1名に減少していた。読めない、の項目では課題開始時に5名であったが終了時は0名に減少していた。

い、の項目では課題開始時に6名であったが終了時は1名に減少していた。読めない、の項目では、課題開始時に5名であったが終了時は0名に減少していた。ト音譜表の読譜に関する意識の変化では、入学時点と授業終了時点と比較すると、スラスラ読める、ゆっくりなら読める、の項目が増加し、あまり読めない、読めない、の項目が減少していた。つまり、課題開始時より課題終了時では「ト音譜表が読める」に学生の意識が変化していることが窺えた。

②ヘ音譜表の意識の変化について

図6はヘ音譜表の読譜についての意識調査結果である。対象は2019年度入学生30名(n=30)、質問は「あなたはヘ音譜表を読むことができますか」であり、入学当初(4月初旬)のヘ音譜表課題開始時と課題終了時(2020年1月末)に調査し、前後比較している。スラスラ読める、の項目では課題開始時に5名であったが終了時は6名に微増していた。ゆっくりなら読める、の項目では課題開始時に9名であったが終了時は20名となり2倍以上に増加していた。あまり読めない、の項目では課題開始時5名であったが終了時は3名に減少していた。読めない、の項目では課題開始時に11名であったが終了時は0名に減少していた。

図5 学生の課題実施前後の意識変化(ト音譜表)

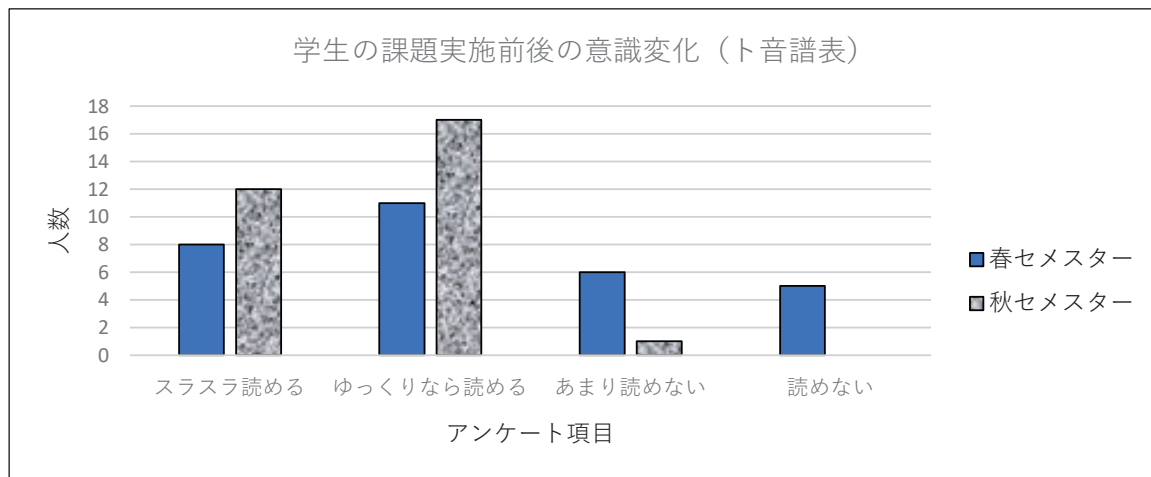
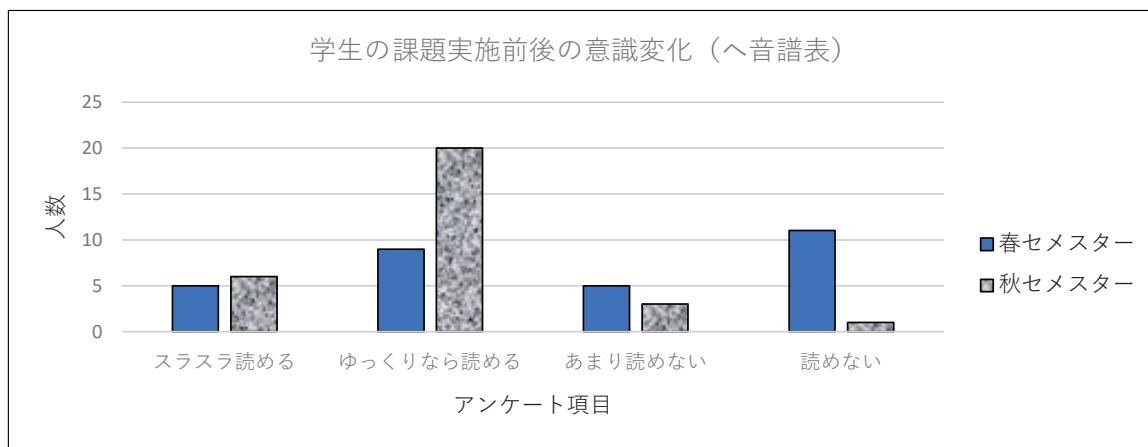


図 6 学生の課題実施前後の意識変化 (へ音譜表)



時は1名となり大幅に減少していた。へ音譜表の読譜に関する意識の変化では、入学時点と授業終了時点と比較すると、スラスラ読める、ゆっくりなら読める、の項目が増加し、あまり読めない、読めない、の項目が減少していた。つまり、ト音譜表の意識と同様に課題開始時より終了時では「へ音譜表を読める」に学生の意識が変化していることが窺えた。一般的にピアノ経験者・未経験者問わずへ音譜表について苦手意識を持つ者が多いため、このように地道な取り組みにより少しでも苦手意識を克服するような取り組みは有用ではないだろうか。

③記述による学生の意識の変化について

読譜課題終了時 2019 年度入学生 30 名に対して行ったアンケート調査の記述箇所より抜粋し報告する (原文まま)。

- ・読譜課題を継続的に行うと読譜力が身に付くと感じることが出来た。特にへ音譜表は入学時点と比べて読めるようになってきた。
- ・毎回の授業の最初に取り組むことでだんだん楽譜が読めるようになった。
- ・五線譜の中の低いドから高いドまでは自然と判断できるようになってきたが、1 オクターブ上や下になるとまだ難しいと感じ

ます。今後も成長していきたいと思えます。

- ・1 年間の取り組みでかなり楽譜を読めるようになってきた。楽譜が読めるようになり弾き歌い曲の「にじ」が演奏できたことが嬉しかったです。
- ・読譜課題は苦手で、最初の頃は指で数えながら行っていましたが、ト音譜表はゆっくりとですが、指を外して読めるようになった。入学当初は音楽経験もなく楽譜が暗号としか思えなかったが、トレーニングを通じて徐々に読めるようになり楽しく感じてきた。
- ・もともとピアノを習っていたので、全部埋めることを目標に毎回取り組んだ。ト音譜表よりへ音譜表の読みが苦手だったので良い練習になった。
- ・この課題に取り組む前は、いちいちドレミを数えていたが、1 年を通してみるとト音譜表はパッと見た時に何の音か分かるようになってきた。
- ・読譜テストが毎回同じものだったので後半は覚えてしまうことがあり、違う課題の方が良いと感じた。

読譜に関する意識調査結果の考察であるが、

2017年～2019年に入学した学生のト音譜表、ヘ音譜表、大譜表の読譜に関する意識については、いずれの項目も「楽譜が読めない」という方向に意識が向いている傾向が見られた。その原因を本論では限定することは難しい。しかし、要因として挙げられることは、「高等学校の芸術科目で「音楽」を選択している率」である。仮にピアノや部活動などで音楽に触れていない者は中学校の「音楽」の授業で楽譜を見たのが最後というケースも考えられる。その場合、大学入学前に3年間程度は読譜する機会を得ておらず、今回の大学入学段階で実施した読譜に関する意識調査では、意識の低下に繋がっていることが可能性としてある。今後は高等学校の芸術科目の「音楽」の選択の有無と該当授業で楽譜を読む機会がどの位あったのかについても調査を加える必要がある。また、ピアノ、吹奏楽、合唱など「楽譜を読む機会や期間が減少しているか」などについて調査を加えていくと原因を突き止めることに繋がるのではないかと考えている。最後に本学が2019年より小学校教諭養成課程を新設した年である。そのため、受験層や入学者の母集団に変化が生じているため、その点についてもデータを蓄積し、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の希望者をクラスター別にして、意識の差と実際の得点率を照らし合わせて検証することが必要であると考えている。

読譜課題（ト音譜表課題、ヘ音譜表課題）の調査結果の考察としては、毎回短時間の集中的なトレーニングにより、基礎的なドレミの階名読みの力をつけることは可能である。しかし、単純にドレミを読む訓練を継続するだけでは総合的な読譜力を身に付けることは難しいため、4分音符だけではなく8分音符や付点4分音符など様々なリズム譜を読譜課題の中に取り入れることや、実施後その課題に音程をつけて歌唱

するなどして総合的な読譜力を育成することに繋げていく必要がある。

学生のアンケート調査の考察であるが、記述箇所では、ヘ音譜表が入学時点に比べると読めるようになってきたこと、継続的に課題に取り組むことで自身の成長を感じていること、弾きたかった曲が実際に演奏できるようになった喜びの報告、ピアノ経験者でもヘ音譜表に苦手意識があり課題の取り組みが功を奏していること、課題が同一のものを課していたため違う課題にも取り組みたいという要望など様々であった。今後は、これらの状況を踏まえ学生の実態に応じた課題の実施と意識変化の背景を追究していきたい。

V. おわりに

本研究では学生を対象に読譜に関する意識調査を3年間実施し学生の現状を捉えることができた。そして、読譜課題を通年で取り組みその結果を示すことが出来た。保育者・教員養成校の音楽に関するカリキュラムは、器楽、歌唱、表現、理論、など多岐に渡る。その中でも「器楽」の科目は、他の音楽の科目のベースとなる重要なものである。その基礎基本を担う科目を学生がスムーズに学修できるよう、読譜指導などを通して教育環境を設定することは、教員として必要不可欠なことであろう。今回は音楽教育の指導法の1つとして、学生がドレミの階名読みを短時間で取り組み、学生が音楽教育を受ける上で必要不可欠な基礎的な読譜力を向上させる試みを行い一定の効果を得ることができた。

また、音楽に関する意識調査の結果からは、読譜について苦手意識を示す学生が増加傾向にあることを捉えた。特にヘ音譜表を読むことに苦手意識を持つ学生が多いことも窺い知ること

ができた。また、読譜課題を数値化し、意識調査の結果と照合することで学生の現状を捉えることができたことは、大きな成果となった。読譜の課題は、授業開始直後に毎回行い、短時間で効率的に継続的に取り組んでおり、学生にとって負担が少なく、無理なく取り組めるものであった。教員としては、少しでも学生に読譜についての苦手意識を克服してもらいたい。特別な取り組みではないかもしれないが、学生の実態に即した指導を地道に続け報告する意味は大いにあると感じている。そして、ピアノや楽器演奏、歌唱する際、楽譜を読むことが学修の妨げにならないレベルまで読譜力を育成することが今後の課題であるということを改めて感じ取ることができた。最後に、今後も読譜課題の実施方法、課題の多様化などを検討し、「器楽」から他の音楽に関する科目が円滑に進むよう学生教育に尽力する所存である。

<参考文献>

- 1) 永井正幸「本学「器楽Ⅰ・Ⅱ」における学修上の課題（序報）－ピアノ初学者の現状からの報告－」、大阪青山大学紀要、12巻、2019年、15-19頁
 - 2) 鈴木由美子「初等教育課程教員及び保育士養成校における音楽基礎力充実に関する一考察：読譜力へのアプローチ」、千葉敬愛短期大学紀要、36号、2014年、75-87頁
 - 3) 平松愛子「基礎技能「音楽」における学生の読譜力についての一考察－通信教育部保育科の学生への調査をもとに」、近畿大学九州短期大学研究紀要、39巻、2009年、39-49頁
 - 4) 二宮紀子「幼児教育学科でのピアノの演奏に関わる授業等での教授法を振り返る－M L 教室の活用と読譜力の育成－」十文字学園女子大学紀要、50巻、2020年、123-136頁
 - 5) 河合玲子・白石朝子・小島友紀「子どもの音楽表現を引き出すための指導法の考案：読譜力に着目して」、名古屋女子大学紀要、63号、2017年、313-321頁
 - 6) 市橋佳明「ピアノ実技に関する実態分析と指導の方向性」、中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究、第3巻、2017年、55-65頁
 - 7) 竹内由紀子「小学校音楽教育における読譜力育成カリキュラムの開発に向けて」、千葉大学教育学部研究紀要、68巻、2020年、393-399頁
 - 8) 二宮貴之・櫻井琴音「音楽経験者・未経験者における読譜力育成に向けた取り組み－課題考案とデータ分析を中心に－」西九州大学子ども学部紀要、第2号、2010年、15-25頁
 - 9) 二宮貴之・櫻井琴音「音楽経験者・未経験者における読譜力育成に向けた取り組み（第2報）－考案課題のデータ分析を中心に－」西九州大学子ども学部紀要、第3号、2011年、13-25頁
 - 10) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年公示）」
 - 11) 文部科学省「幼稚園教育要領解説（平成30年）」
- 付記：本研究は聖隷クリストファー大学研究費
取り扱い規程第3条（2）国際学会参加費の
補助の規定により補助を受け、国際学会に
おいて研究成果を報告している。